

静脈炎、血管痛への対処法（付. 抗がん薬漏れ）

静脈炎とは、静脈に炎症が起こった状態で、炎症の徴候である発赤、腫れ、痛み、硬結などが静脈に沿って出現します。

抗がん薬には血管刺激性があり、静脈炎を起こすことがあります。また、血管刺激性の低い抗がん薬でも、点滴の針の刺激などで静脈炎が起こることがあります。

1) 原因

薬の性質によるもの

①薬の pH（酸性・アルカリ性）

血液の pH は弱アルカリ性（pH7.4 程度）です。

薬の pH が酸性側あるいはアルカリ性側にかなり傾いた場合、血管を刺激し、痛みや炎症を引き起こす原因となります。

②薬の浸透圧

浸透圧が異なる溶液に接触すると、血管内皮細胞が傷つきます。

③薬の刺激性

注射部位の血管内皮細胞に障害を与えられます。

その他

点滴速度、血管の収縮、薬との接触時間の延長

《静脈炎・血管痛を起こす、代表的な抗がん薬》

- | | |
|----------|-----------|
| ・エピルビシン | ・ゲムシタビン |
| ・ダカルバジン | ・ロゼウス |
| ・エルプラット | ・ドキシソルビシン |
| ・トレアキシシン | |

* 他にも起こす可能性のある薬があります。



2) 静脈炎・血管痛の症状

- ・点滴の針が入っている所の周辺やその腕の赤み、痛み、違和感、腫れ。
- ・点滴終了後の血管のつっぱり感・硬くなる・赤み・色が変わる(色素沈着)。

3) 静脈炎・血管痛の対処方法

① 点滴の針の刺し方の工夫

- ・血流の良い太い静脈をできるだけ使用し、関節部位を避ける。
- ・毎回、できるだけ穿刺部位を変える。
- ・長く針を留置していた静脈、過去に静脈炎を起こした血管はさける。

② ホットパックの使用

- ・血管を温めることにより血管を広げ、薬の接触を減らし、静脈炎・血管痛の予防・緩和を図ります。

☆ホットパック:アイスノンのようなジェル状パックを温めて使います。

③ 針の刺入部の確認、刺し替え

- ・血管外に薬が漏れていないかを確認します。
- ・薬剤が漏れているとき、それが疑われる時には針を刺し替えます。

4) 抗がん薬が漏れたときの対応（重要！）

- ・抗がん薬の種類によっては血管外に漏れると組織を傷め、皮膚潰瘍、筋の機能障害などが残ることがあります。

★ 血管の痛みや違和感がある場合は、すぐに看護師を呼んでください。

【薬剤別の対処例】

● エピルピシン

点滴終了後は、冷やすことで点滴後の血管炎を予防します。

- ・アイスノン・冷えピタ・お菓子の保冷剤などで 3 日間続けて冷やします。
※冷やす位置は、点滴の針が入っていた部位より上側(体に近い方)です。
- ・点滴中に血管痛や静脈炎が起こったときは、症状が落ち着くまで入浴等、血管を温める行為は控えてください（シャワーは構いません）。

● ダカルバジン

光や熱で分解された物質により血管痛が起こります。

- ・点滴中は光を通さない袋をかぶせ、薬に光が当たるのを防ぎます。

● その他の注意

- ・これらの処置後も痛み、腫れが続く場合は、病院に連絡して下さい。
- ・その他の薬剤でも、帰宅後に点滴を行なった血管が痛くなったり、針を刺した部位が赤く腫れているようでしたら、病院へご連絡ください。